

調査報告

初妊婦の母親像とその夫の父親像

—質問紙の自由回答から—

笹木 葉子・村田 亜紀子

(2012年12月26日受稿)

抄録： 本研究は、初妊婦とその夫が描く、母親像と父親像を明らかにし、その認識についての示唆を得る事を目的とした。プレママセミナーに参加した妊婦夫婦 212 名から「赤ちゃんにとってどんな母親・父親になりたいか」を自由回答形式で求めた。その結果、妊婦からは【子どもの安全基地】【子どもの育て方】【子どもとの向き合い方】【漠然とした心象】の4つのカテゴリーが抽出された。妊婦の夫からは、【子どもを支える存在】【子どもとの接し方】【父親としての威厳】【育メン志望】【漠然とした心象】の5つのカテゴリーが抽出された。妊婦の母親像は、子どもの安全基地となって包み込み、いつも側で優しく厳しく関わる、子どもを尊重し自分自身を律して育児する等、具体的イメージを持ち、父親は、母親と同等に育児し、子どもと遊び身近な存在の育メン志向である反面、昔の様な父の威厳を示すイメージも持っていることが示唆された。

I. はじめに

我が国の合計特殊出生率の推移をみると、1974年代から人口置換水準（出生率が減少し人口減少が起こるとされる水準）を割り込み、少子化の進行が始まっている¹⁾。平成24年版厚生労働白書によると、我が国の合計特殊出生率は、2005（平成17）年には1.26と過去最低を更新した。2006（平成18）年—2008（平成20）年の合計特殊出生率は、前年を上回っていたが、2009（平成21）年は前年と同様1.37と横ばいとなり、2010（平成22）年は1.39と前年を上回ったが、依然として低い水準にあり、長期的な少子化の傾向が継続している²⁾。このように少子化は進行し始めて40年以上経過しており、現代の出産・育児世代は、少子化が進行する中で生まれ育った世代といえる。つまり、子育てを見聞きする経験が乏しく、頼りの母親も同じように経験が少ないことにより子育ての伝承がスムーズにいかないことが容易に推察される。少子化対策においては1999年春に当時の

厚生省が、育児に対する父親・母親の共同責任や子育ての大切さ・楽しさなどについて広報啓発を行った。「育児をしない男を父とは呼ばない！」のキャッチフレーズで、ポスター、テレビ、新聞等の媒体により、一般的に育児への参加が少ない男性の責任意識や子育てへの参加の必要性を訴えるキャンペーンを繰り広げ³⁾ 社会に父親の育児参加の視点が提示された。2006年の夫婦の子育て分担についての調査では、若い夫婦ほど父親が子育てに参加している傾向があり、子育てを夫婦同じに分担している女性は子育て負担感が少なく、子育てに参加している男性は、子どもを持つことで、得られるものが多いと感じる人が多かったと述べられている⁴⁾。少子化対策プロジェクトによって、夫の育児参加が一般化し始めていることが窺われ、ここ10年あまりで、百貨店やスーパーのベビー休憩コーナーでは、父親のみで子どもを連れてオムツ交換をしている姿が普通の光景になっている。2010年「イクメン」が流行大賞に

ノミネートされてからは、子育てを楽しみ、自分自身も成長する男性、将来そんな人生を送ろうと考えている男性のことを、「育メン」とよび、イクメンプロジェクトが立ちあがり、参加型の公式サイトやハンドブックの配付等により、男性が育児をより積極的に楽しみ、育児休業を取得しやすい社会の実現を目指しており^{3, 5)} これも徐々に浸透してきている。このような夫婦の育児役割に垣根がなくなりつつある現状の中で、育児を実践する前の初妊婦とその夫は、どのような親になることをイメージしているのかを明らかにし、親役割についての認識の示唆を得ることを目的に本研究に取り組んだ。

II. 研究目的

初妊婦とその夫が親となる過程にどのような母親像、父親像を描いているのかを明らかにし、親役割の認識とその支援についての示唆を得る。

III. 研究方法

1. 研究対象

北海道内4市において、財) mcfhが主催したプレママパパクラスに希望参加した妊婦とその夫に、質問紙を配付し、回収にて調査協力を承諾した278組556名中、自由回答に記載のあった135組212名(回収率95.6%・有効回答率37.8%)を調査対象とした。

2. 調査期間

2011年6月-2012年3月

3. 調査方法と調査内容

1) 調査方法

自記式質問紙において、自由回答方式で求めたデータを、質的帰納的方法によって分類整理した。

2) 調査内容

①妊婦とその夫の属性

妊婦と夫の年齢、妊婦の妊娠週数、妻の妊娠週数、妊婦と夫の職業

②質問内容

質問形式：自由回答形式

母親「赤ちゃんにとってどんな母親になりたいですか。」

夫「赤ちゃんにとってどんな父親になりたいですか。」

3) 調査手順.

①自由回答データを妊婦、夫に分けて、意味内容ごとに区切りコード化する。

②類似した意味単位を集めてサブカテゴリーとして括る。

③サブカテゴリー間の類似項目をさらに統合再編してカテゴリーを抽出しラベル化する。

統合にあたっては、共同研究者間で納得いくまで検討を繰り返し妥当性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

研究目的と方法、個人情報への厳重管理と学会発表の了解、終了時破棄等のデータの取り扱いを紙面と口頭により説明した。質問紙に回答後提出により承諾とする事を確認し依頼した。

IV. 結果

1) 対象の概要

本研究の趣旨を理解し、自由回答項目に回答した妊婦は116名、その夫は96名、合計212名であった。回答の内訳は、夫婦共に回答したのは77組154人(72.6%)、妊婦のみ回答したのは39名(18.4%)、夫のみ回答したのは19名(9.0%)であった。

妊婦の年齢は19歳-42歳、平均年齢31.7歳(±4.3)、妊娠週数は8週-37週、平均週数24.8週(±7.0)であった。夫の年齢は22歳-48歳、平均年齢33.2歳(±5.2)妻の妊娠週数は8週-37週、平均週数24.5週(±7.2)であった。(表1参照)

妊婦の職業は、無職51名(44.0%)、有職62名(53.4%)で、その内訳は、会社員35名(30.2%)、公務員5名(4.3%)、派遣社員・パート10名(8.6%)、自営業1名(0.9%)、学生2名(1.7%)、無回答1名(0.9%)であった。夫の職業は無職2名(1.5%)、会社員79名(82.3%)、公務員6名(6.3%)、団体職員1名(0.7%)、派遣社員・パート1名(1.0%)、

自営業5名 (5.2%)、学生1名 (1.0%)、無回答1名 (1.0%) であった。(表2参照)

表1 対象者の概要

	平均値	範囲	標準偏差
妊婦年齢	31.7 歳	19-42 歳	4.3
妊婦の妊娠週数	24.8 週	8-37 週	7.0
夫年齢	33.2 歳	22-48 歳	5.2
妻の妊娠週数	24.5 週	8-37 週	7.2

表2 夫婦の職業

職業	妊婦		夫	
	人	%	人	%
無職	62	53.4	2	2.1
会社員	35	30.2	79	82.3
公務員	5	4.3	6	6.3
団体職員	0	0.0	1	1.0
派遣・パート	10	8.6	1	1.0
自営業	1	0.9	5	5.2
学生	2	1.7	1	1.0
無回答	1	0.9	1	1.0
合計	116	100	96	100.0

2) 分析結果

「赤ちゃんにとってどんな母親・父親になりたいですか」の自由回答データを妊婦と夫別々に分析した。妊婦からは156の意味内容コードを抽出した。抽出された意味内容コードを分類統合した結果、9つのサブカテゴリーに集約された。さらにサブカテゴリーの意味内容の同質性、異質性に基づき分類し4つのテゴリーに集約された。妊婦の夫からは129の意味内容コードを抽出し、15のサブカテゴリーに集約、意味内容を分類し5つのカテゴリーに集約された。内容の詳細は表3. 4に示した。

初妊婦の母親像とその夫の父親像についてのサブカテゴリーとカテゴリーを、抽象度の高い順にカテゴリーは【 】、サブカテゴリーは< >、意味内容コードは「 」で示し、不足な言葉を（ ）で補った。

1. 妊婦の母親像

1) 【子どもの安全基地】

妊婦は、子どもの安全基地として、「いつも笑顔で」「笑顔を絶やさない」「明るく」「元気いっぱい」に「楽しく子育て」しく明るく元気な母親でいる反面、「優しく」「寛大」で「おおらかに」「ゆったり」「穏やか」に関わるなど<優しくおおらかに>に子どもを包み込む母親になりたい。さらに「信頼でき」て「頼もしい母」「肝心な時に必要とし」「子どもの思っている事をわかってあげる」「一番の味方」「よき理解者」等、<安心できる>母親になりたいと思っていた。

2) 【子どもの育て方】

妊婦は子どもの育て方について、「さみしい思いをさせないように」「常に近くにおいて様子を見てあげたい」「常に愛情を感じられるように育てたい」「たくさんの愛情を注いであげたい」「愛情をいっぱい注ぎ」「いつもそばにいる母親」でいる事等<こころを育てる>視点を持っている。

また、子どものために「優しいけれど、ダメなことはダメと教える」「優しく、厳しく導く」「甘やかしすぎない」「子どもに自立と責任感を教えられるように」「正しい知識で向き合う」「世間を教える存在」(になりたい)。また、躰をするために、自分自身も「将来の夢になれる」「自慢の母親」「子どもの見本になれる」等、<子どもを導く>母親になりたいと思っていた。

3) 【子どもとの向き合い方】

妊婦は、子どもとの向き合い方として、「話をきちんと聞く」「困った時に相談にのれる」ようになりたい。また「子どものことをよく考え」子どもを「一個人として認め」「尊重し」「すべてを受け入れ」「誠実に向き合い続ける」母親になりたいと考え、「子ども目線で」育児し、「良い環境を与える」「子どもの能力をつぶさないように」「のびのび育つ環境をつくってあげる」等、<子どもを尊重する>ことができる母親になりたいと考えていた。また、「心に余裕をもって接する」ように心がけ、「感情的にならない」「イライラしない」「キビキビした顔をしない」「ストレスを与えない」「温かな顔を向けられる」「怒らない」ことを意識

しようとしている。また「子どもと共に成長する」ように「色々なことに挑戦していきたい」「子どもと一緒に一つ一つ成長していきたい」等、自己研鑽することで子どもと向き合いたいと思っていた。

4) 【漠然とした心象】

妊婦の中には「大切な存在」「恥ずかしくないような母親」「自分が親にしてもらったように」と曖昧でくぼんやりとした母親イメージ>や「想像がつかない」「まだわからない」「これから考える」等<イメージがない>回答もあった。

表3 妊婦の母親像

カテゴリー	サブカテゴリー
子どもの安全基地	明るく元気
	優しくおおらか
	安心できる
子どもの育て方	こころを育てる
	子どもを導く
子どもとの向き合い方	子どもを尊重する
	自分自身を律する
漠然とした心象	ぼんやりとしたイメージ
	イメージがない

2. 妊婦の夫の父親像

1) 【子どもを支える存在】

妊婦の夫は、子どもを支える存在として<優しい>父親のイメージがあり、「必ず力になってくれる」<頼りになる>存在、「一緒にいて安心できる」「安心感を抱かせられる」等<安心させられる>存在になりたいと思っていた。

2) 【子どもの接し方】

妊婦の夫は、子どもとの接し方について「遊んであげられる父親」「たくさん遊ぶ」等<共に遊ぶ>ように、「おもしろく」「明るく」「楽しく」「たくさん笑う」等<楽しい>接し方で、「いつもそばにいる」<身近な>存在として、「気持ちを理解してあげられる」「何を思っているかわかる」ように意識し、「必要な時にサポートをしてあげる」時には「友達のように」「子どもの目線」で<子どもの思いに添う>ように接したいと思っていた。

3) 【父親としての威厳】

妊婦の夫は「見習える父」「指針となるような父」「目標となるような父」として（子どもの）<見本になる>父親、「強い父」「厳しい父」として接することで<尊敬される>存在、しっかりと<躰をする>ことにより「子どもの育児に責任の持てる親」となり、【父親としての威厳】を示したいと思っていた。

4) 【育メン志望】

妊婦の夫は「奥さんの良きパートナー、サポーター」となり、「まかせっきりにせず夫婦で協力する」「お母さんを大事にする」等<協力的に育児する>父親、「自分一人で一通り（子どもの）世話ができる」「イクメン」等<主体的に育児する>父親、「母親に負けない（育児）」「泣き止んでくれる」等<母親のような存在>の父親で、育メンになりたいと思っていた。

5) 【漠然とした心象】

妊婦の夫の中には「父親らしい父親」「海のような」「大木のような」「大きい父親」など、<ぼんやりしたイメージ>を持ってはいるものの、漠然として具体的でない回答が多かった。

妊婦の夫の中には、「まだ考えていない」「出てこないとわからない」等<父親イメージがない>回答もあった。

表4 妊婦の夫の父親像

カテゴリー	サブカテゴリー
子どもを支える存在	優しい
	頼りになる
	安心させられる
子どもの接し方	共に遊ぶ
	楽しい
	子どもの思いに沿う
	身近な
父としての威厳	尊敬される
	子どもの見本になる
	子どもに躰をする
育メン志望	主体的に育児する
	協力的に育児する
	母親のような存在
漠然とした心象	ぼんやりとしたイメージ
	イメージがない

3. 妊婦とその夫の各カテゴリー割合 (図1)

妊婦は156の意味内容コードの数を、妊婦の夫は129の意味内容コードの数を、それぞれのカテゴリーごとに算出しその割合を図1に示した。

1) 妊婦の回答

【子どもの安全基地】54% (84件), 【子どもの育て方】21% (33件), 【子どもとの向き合い方】21% (33件), 【漠然とした心象】4% (6件)であった。

2) 妊婦の夫の回答

【子どもを支える存在】27% (35件), 【子どもの接し方】22% (28件), 【父としての威厳】22% (28件), 【イクメン志向】11% (15件), 【漠然とした心象】18% (23件)であった。

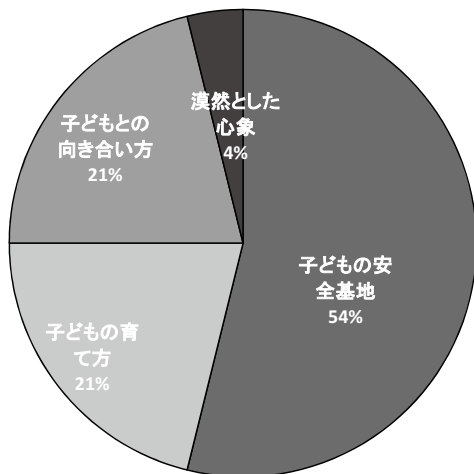


図1 妊婦の母親像のカテゴリーの割合 n=156

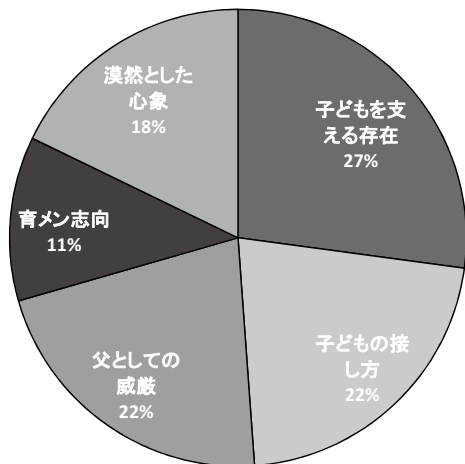


図2 夫の父親像のカテゴリーの割合 n=129

V. 考察

1. 妊婦の母親像

妊婦は、＜明るく元気＞で＜優しくおおらか＞に子どもに関わり、＜安心できる＞【子どもの安全基地】としてのイメージがあり、回答した妊婦の半数以上が同じような母親像を持っていた。また、【子どもの育て方】については、「愛情をいっぱい注ぎ」「いつも側にいて」「見守る」等＜心を育てる＞ことを意識していた。その反面「優しくかつ厳しく」「子どもの見本になれる母親」「世間を教える存在」として＜子どもを導く＞躰の必要性も感じ、子どもの育て方についても妊娠期からすでに考えていることが窺われる。また、【子どもとの向き合い方】では、「子どもの話を聴ける母親」「子どもを一個人として認める」「子ども目線」で関わる、良い環境を与える」等、＜子どもを尊重する＞視点を持っており、「余裕を持って接する」「感情的にならない」「イライラしない」「子どもと共に成長する」等、親となるために＜自分自身を律する＞ことも意識されていることが明らかになった。総務庁が5年毎に18歳～24歳の未婚の青年を対象に行っている世界青年意識調査の第7回調査（2003年）における、母親の存在イメージについて⁶⁾では、順位に多少の違いはあるものの、サブカテゴリーとほぼ同じ内容のイメージ項目が挙げられている。本調査の妊婦の平均年齢（31.7歳）から逆算すると、調査された年は21～22歳でほぼ同世代への調査であったことがわかる。この世代の婚姻前の母親の存在イメージと妊娠後の母親像のイメージの同一項目は、自分が幼少期から見てきた自分の母親のイメージがモデルになった可能性が高い。しかし今回の調査では、子どもの頃の自分自身のイメージだけでなく【子どもとの向き合い方】において、子どものために自分自身を抑制し律する等、子どもの躰まで見据えた視点を持ち合わせていることがわかった。その反面、全体の4%と少数ではあるが、【漠然とした心象】として、＜ぼんやりとしたイメージ＞の回答もあった。その回答をした妊婦の妊娠

週数を見てみると、妊娠11週、12週、妊娠23週など、妊娠前期～中期であった。妊娠期は母親役割の取得の第1段階であり、母親役割の予期的段階にあるといわれ⁷⁾、まだ母親としてのアイデンティティの獲得途上であることが関連していると推察される。このことから、妊娠期の母親役割獲得のために、妊婦健康診査の保健指導場面では、妊婦のためだけでなく胎児のために行動変容が必要であることを伝え、胎児画像への説明を丁寧にするなどの機会を捉えて、胎児への関心を高めるように関わる。母親学級等では、育児技術の体験や子育てのイメージを膨らませられる講話やDVDの鑑賞が効果的であると考えられる。

2. 妊婦の夫の父親像

妊婦の夫は、〈優しく〉て〈頼りになり〉、〈安心させられる〉ことで、【子どもを支える存在】になることをイメージしていた。【子どもの接し方】では、「たくさん遊ぶ」「面白く」「楽しく」「いつもそばにいて」〈身近な〉存在としてフランクに関わるイメージを持っていた。その反面、〈見本になる〉こと、〈尊敬される〉こと、しっかり子どもの〈躰をする〉ことにより、昔ながらの【父親としての威厳】を保つイメージもあり、フランクな関わりと威厳を持った関わりの両方の思いがあることがわかった。これは、Benesse教育センターが2005年に行った乳幼児の父親への理想的な父親のイメージ調査⁸⁾や第7回世界青年意識調査による、未婚の男性の父親の存在イメージの調査⁶⁾でも同様の結果である。【育メン志望】の夫は、「奥さんの良きパートナー」となり、「(母親に)まかせっきりにせず夫婦で協力する」等母親に〈協力的に育児する〉タイプと、「自分一人ですべて世話ができる」ことを目指し〈主体的に育児する〉タイプ、そして「母親に負けない(育児)」「(子どもが)泣きやんでくれる」〈母親のような存在〉なりたいタイプに分けられ、いずれも育児を父親のものとしてとらえていた。昔は男女の役割観が根強く、父親が育児をすることは珍しいことであった^{9, 10)}。しかし、男女の役割観を1977年

から5年毎に時系列でみた調査¹¹⁾では、「男は外で働き、女は家庭を守るべき」という男女の役割観に反対する割合は、1977年の調査開始時は31.7%に過ぎなかったが、2008年では65.1%と約2倍になり、「子どもが小さい時は子どもの世話をするのは母親でなければならない」という男女の役割観に反対する割合は、2003年と2008年の調査で、63.7%から65.5%に増加している。どの調査も、男性より女性の方が反対する割合が高かった。このように、家事や育児に関する認識は、31年間でも男女とも大幅に変化している。この時代的価値観の変化が、父親にも育児を楽しみ関わりたいという育メン志望の背景にあり、さらに夫は自分の体を通して父親になれないハンディがあるにも関わらず、妻の妊娠中から育メンへの希望があるのは、昨今のイクメンプロジェクトの効果を評価できる結果といえる。しかしその反面「海のような」「大木のような」「父親らしい父親」等具体的ではない〈ぼんやりとしたイメージ〉の夫も比較的多くおり、「出てこない(生まれてこない)とわからない」「考えていない」などの〈イメージがない〉夫もいた。妊婦においても4%ほどそのような回答があったが、夫の方は18%と妊婦の5倍近くイメージできない割合が高かった。父親としての実感は、子どもの出生後に子どもと対面する事によって得たと述べる父親が多い⁷⁾といわれるように、妊娠期に漠然とした状態であるのは理解できる。そこで、父親の役割意識を高めるためにも、夫も妊婦と同様に妊娠中から胎児を意識し、実感できるプログラムや育児体験を多くできる環境を支援する必要性をこのデータからも再認識できる。

まとめ

初妊婦の母親像は、子どもの安全基地となって、包み込み、いつも側で優しく厳しく関わる、子どもを尊重し自分自身を律して育児する等の具体的なイメージを持ち、妊婦の夫は、母親と同等に育児し、子どもと遊び身近な存在で、育児を母親のよ

うにこなしていく育メン志向である反面、昔のような父の威厳を示すイメージも持っていることが明らかになった。また具体的なイメージを持っている妊婦、夫がいる反面、親としての自分のイメージが具体的にない、または考えられないとの回答もあった。このような回答は、妊婦では妊娠初期～中期前半の妊婦に若干あったのみであったが、夫では約2割と、妊婦より極端に多かった。このことから、妊娠中から妊婦もその夫とともに、親役割を意識できるように、妊婦健康診査の保健指導や診察時の胎児画像で丁寧に説明し、マタニティ教室等を利用し、育児技術の機会や子育てのイメージを与える関わりは、親役割獲得過程の促進には意義深いことが示唆された。

文 献

- 1) 厚生労働省：平成23年（2011）人口動態統計（確定数）の概況。（2012年10月5日取得，<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei11/index.html>）
- 2) 厚生労働省：平成24年版 厚生労働白書. 308-312, 東京, 日経印刷, 2012.
- 3) 厚生労働省：平成11年版 厚生労働白書. 第1編 第2部 第5章 第1節 少子化への対応. (2012年10月5日取得, http://www1.mhlw.go.jp/topics/profile_1/koyou.html)
- 4) 諸藤絵美:父親の子育て参加と家族のあり方. 放送研究と調査, 56 (3) : 56-63, 2006.
- 5) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局の委託事業「育メンプロジェクト」ホームページ (2012年10月5日取得, http://ikumen-project.jp/project_about.html)
- 6) 総務庁青少年対策本部：第7回世界青年意識調査報告書 調査の概要1章 2親子関係：2004. (2012年10月5日取得, <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth7/html/no2-1-2.html>)
- 7) 進藤幸恵, 和田サヨ子：母性の心理社会的側面と看護ケア. 109-125, 東京, 医学書院, 1994.
- 8) 汐見稔幸, 大日向雅美, 後藤憲子, 高岡純子, 真田美恵子, 木村治生, 邵勤風：第1回乳幼児の父親についての調査報告書. 41-43, 東京, (株)ベネッセ次世代育成研究所, 2006.
- 9) 岸本 弘:新しい父親像と母親像の研究(Ⅱ). 明治大学人文科学研究所紀要, 27 : 143-186, 1989.
- 10) 荒牧央：現代社会の父親像調査 温かさか権威か. 放送研究と調査, 50 (12) : 40-59, 2000.
- 11) 総務庁青少年対策本部：第8回世界青年意識調査報告書 調査の概要1章2親子関係：2009. (2012年10月5日取得, <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth6/html/no2-1-2.html>)
- 12) 森田亜希子, 森恵美, 石井邦子：親となる男性が産後の父親役割行動を考える契機となった妻の妊娠期における体験. 母性衛生, 50 (2) : 425-432, 1010.
- 13) 内閣府：平成24年版子ども・子育て白書. 3-15, 東京, ぎょうせい, 2012.

The Mother Image of Primigravida and the Father Image of Primigravida Husband

SASAKI Yoko and MURATA Akiko

Abstract: This study aims to specify the mother image of primigravida and the father image of primigravida husband and to clarify the implications from those acknowledgements. The survey was conducted by the free style answer sheet asking "what sort of mother / father would you like to be?" to 212 pregnant couples attending the pre-mother seminar. As the result, four categories are extracted about the mother image from the group of pregnant women: "safe base for child," "how to raise child," "how to face with child" and "obscure mental image." On the other hand, five categories are extracted from the father image between their husbands: "being to support child," "how to face with child," "authority as father," "aspiration to be IKU-MEN" and "obscure mental image." Findings from the survey imply that the mother image of expectant mothers holds specific images such as: dealing with child gently as well as strictly in order to protect the child as the safe base; and raising child with respect and self-discipline as mother, while the father image holds the traditional paternal authority although the image resemble with that of mother, for instance: raising child as much as the mother; and close being playing with child represented in the image of IKU-MEN.